



学園花の村機関紙第80号

2014年8月3日(日)

編集兼発行人 松井道夫

TEL (0537) 24-0101

Fax 24-0242

〒#

mm317@tokai.or.jp

地べたからの視座の復権

—土着の感性を磨く— 津野幸人

最近の政局をうかがうと、わが国も米国の片棒を担いで、戦争に駆り立てられそうだ。思い出すのは、先の戦争の開戦時と終戦時に外務大臣を務めた東郷茂徳が、A級戦犯として獄中に入ったときに同僚の戦犯を詠んだ歌である。

此の人ら信念もなく理想なし

ただ熱に付するの徒輩なるのみ

大事なものは信念よりも理想だと思う。高い理想がなくて、信念だけでは批評精神が生まれにくい。いつの時代でも国家主義的政治家は国民を「熱に付するの徒輩」としたがつているのだ。「熱に付するの徒輩」としてがつているのだ。かく申す私も一五歳で特攻隊に憧れて、海軍航空隊に入隊した。

頼もしいのは、朝日俳壇に載った「反戦で毒舌家なり生身魂」(中村誠示)たちである。この句の作者は軍隊体験者で、その毒舌から迸るのは、不戦の誓いを棚上げにして、再び若者を戦

場へ駆り立てる老獪な政治家への怒りであろう。

私にとつて消えがたい記憶は、戦中戦後の食料不足である。この原点から、食糧自給を省みない貿易至上主義者を批判し、「愛国とは郷土愛である。郷土愛は、農業なしには生まれぬ。」との信念を繰り返して吐露しているのである。

松山藩士族に生まれた正岡子規には、次のような望郷の歌がある。

古さとに我に五反の畑あらば

硯を焚きて麦植ゑましを

現実には松山市郊外の道後平野で、米麦作の五反百姓では彼の生活レベルを維持することはできないが、その反面では飢えの心配はなかったであろう。

松山藩では士族出身者で農業を選んだ人は稀であった。若いころから農業労働で体を鍛えていなければ、当時の人力農耕はできない。また、士族固有の矜持と潔癖感を保ちながら、肥え桶を担って畔道が歩けただろうか。

司馬遼太郎の小説「坂の上の雲」の中に登場する農民出身の陸軍中将・仙波太郎(私と同じ集落の元百姓)は、「松山には旧士族の一味がおつてつねにわれわれ平民出身者を軽蔑し、差別

待遇をする傾きがあるので不愉快だ」と言った(松山市医師・仙波嘉清氏談)。そして、郷里に永住するのを嫌って夫人の郷里岐阜県で生涯を終えた。また、「このたびのあつぱれな勝ち戦(日露戦争)は、百姓や町人の子が兵隊となつて奮戦いたせしことにもとづいています。」との文を知人に送っている。『二十二連隊始末記』(客野澄弘著 106頁)。

明治中期から産業社会の発展に伴つて、農村が疲弊するのであるが、この時多くの農本主義者が輩出した。官僚農本主義者は、農民が減れば軍隊が弱くなるという一点をその論拠としたように思われる。

為政者の立場を離れて文明論として農業擁護論を展開した人は少ない。この時代の文人の用語として登場するのは「澆季文明」の語句だ。澆季(ぎょうき)とは道德衰え、人情浮薄の時代をいい、もつぱら儒教道德に照らしての西欧文明の批判用語であった。

いま我々に必要なのは、浪費文明と大衆社会の克服である。その手段として農業を重視する立場(新重農主義)の確立だ。その第一着手は、まず、肉体労働で土と深く交わることで、地べたからの視線で社会を透視すること、である。農業を犠牲として成長した「澆季文明」の地平には経済不況と戦争の暗雲が漂っている。